発行日　2004年10月20日（隔月20日発行）通巻241号　1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター　会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial & Error

No.241
November-December2004

〈特集〉

HIV/AIDSはなにを問いかけているか

〈緊急報告〉日本イラク医療支援ネットワーク(JIM-NET)設立に関して

〈“レッドリボン”は、HIV/AIDSとともに生きる人々を差別しないというメッセージシンボル〉

JVC Japan International Volunteer Center

〈特集〉

HIV/AIDSはなにを問いかけているか

いま、人類の力が試されている。エイズ問題を考えると、そんな思いにとらわれる。その「力」とは科学とか医療の力ということではなく、もちろんそれも大事なのだが、人を愛するとか愛し合うとか、助けるとか助け合うとか、お互いの存在をまるごと認めるとか認め合うとかいう、人を人たらしめている「力」のことである。いま世界の人々はそのことに気付き、コミュニティーを組んでこの人の力を試す闘いに挑もうとしている。JVCもまたそのコミュニティーのメンバーだ。日本でエイズ問題に第一線で挑む３人に、それぞれの課題を報告してもらった（編集部）。

エイズ問題とはなにか

アフリカ日本協議会代表／ＪＶＣ理事　林 達雄

■なぜ「見えにくい」のか

グローバル化の進む現代は感染症が国境を越えて広がる時代でもある。ＳＡＲＳ、狂牛病、西ナイル熱など毎年新しい病気が話題に上る。世界のどこかで流行した病気は、別の地域でも流行しやすい。エイズはこうした時代を代表する問題である。二十年前この病気が最初に話題に上って以来、六千万人が感染し、二千万人がすでに死亡している。

現時点で地球人口の百人に一人の問題である。昨年一年間だけで五百万人があらたに感染し、五十万人の子どもを含む三百万人が亡くなっている。例外なく世界のどこにでもある、最もありふれた病気のはずである。それにもかかわらず、今なおエイズは「見えにくい」問題だといわれている。

もしも、あなたがエイズに感染したら、どのような現実に直面するだろうか？　十四年前にエイズ検査陽性の知らせを受けたケニアのアスンタ・ワグナさんは、「死への恐怖を味わっただけではなく、家族や学校からも受け入れてもらえず、私という人間のすべてが否定された」と言う。この病気に感染してしまった人にとって、エイズとは生死を左右する健康の問題であると同時に、社会から否定され、烙印（らくいん）を押される（偏見・差別・人権）問題である。この二つの問題こそが、世界の百人にひとりが日々直面している現実である。

感染者たちの話を聞けば、はっきりと見える問題である。しかし、これまで行なわれてきたエイズ対策の多くは、「これ以上感染者の数を増やさないこと（＝感染予防）」にのみ集中し、生身の人間たちの現実に目をそむけてきた。こうした偏った対策のあり方が問題をさらに見えにくくし、エイズを減らすどころか、増やし続けてきたのだ。感染者たちの抱える問題を社会全体で受けとめ、その解消に向けて努力した、数少ない国だけが感染予防にも成功してきたのだ。

■弱いもの、貧しいものに

生死と健康の問題は大人だけではなく、母子感染を通して子どもにも及ぶ。南アフリカにはホスピスで死を待つ子どももいる。働き盛り、子育て中の両親の命を奪うため、一家の経済を危うくし、孤児を生み出す。貧しい者をさらに貧しくする経済問題であり、次の世代に影響を及ぼす世代を超えた問題でもある。また、近年の医療技術の発展は、貧富と南北の格差を広げてきた。九六年にエイズ治療が確立※注①して以来、先進国の感染者は薬を服用することにより、生きのびることができるようになった。しかし、世界の感染者の九割が暮らす途上国には薬は届きにくい。そんな状態が続いてきた。

偏見と差別の問題の背景には、恐怖がつきまとう。エイズをうつされるのではないか、という恐怖である。恐怖は沈黙を生みやすい。感染者が八人に一人となった南アフリカでも、つい最近までエイズを語る人がほとんどいなかった。

問題は見えない中で広がってゆく。社会的に弱い立場の人々が差別の標的となりやすい。感染者本人だけではなく、同性愛者、セックスワーカー、ドラッグユーザー、外国人労働者、女性などである。エイズ関係者の間ではこうした人々のことをブルネラブル・コミュニティ（vulnerable community）と呼んでいる。こうした人々が尊重され、社会の前面にでることによって、問題は誰の目にも明らかになり、解決に結びつく。

■予防・啓発活動として、歌を歌って行進するボランティアたち。
エイズ問題は、他者とつながる意味をあらためて問いかける。

■WTOが弱者を苦しめる

〇四年七月、第十五回世界エイズ会議が開催され、二万人の関係者がバンコクに集まった。会場の中に入るとエイズ一色の世界である。研究者、医療関係者、各国政府、国連、製薬会社、NGO、そして世界各地から感染者、ブルネラブル・コミュニティの面々が顔をそろえている。ここでは、感染者たちが一国の首相や製薬会社の社長とも壇上で向き合い、エイズ対策のあり方を論ずることができる。今回の争点は二つあった。エイズ治療の課題と、最近浮上しつつある差別と人権の課題である。

途上国のエイズ治療に関しては、二〇〇〇年のダーバン会議から〇二年のバルセロナ会議にかけて大きく前進した。ダーバン会議の際、会場を柵の外から取り囲み、治療を呼びかけていた南アフリカの感染者たちが流れを変えたのである。これまで途上国でのエイズ治療を阻んでいた第一の関門は、WTO（世界貿易機構）の特許・知的所有権の協定であった。安価な薬の製造・輸入を可能にする法律を制定した南アフリカ政府は、製薬会社からWTOの協定違反だとして裁判に持ち込まれていた。この法廷に乗り出した感染者グループが、世界中からの応援署名を受けて、この裁判を勝利に導いたのである。

この勝利がきっかけとなって、WTOの協定を緩和された。これを受けて、バルセロナ会議では、WHO（世界保健機構）が〇五年までに途上国の三百万人への治療を保障するという計画を発表し、エイズ・結核・マラリアと戦う世界基金は、途上国での治療にお金を出し始めた。当事者たちが先頭を切って行動し、市民・NGOが数の力で応援すれば、世界は変わることがある。世界のルールが変われば、国際機関は待ってましたとばかりに動き出す。そしていま、アジア・アフリカの国々ではエイズ治療が現実化しつつある。治療という生存への出口がほんの少しだが見えてきたのだ。生存への出口が見えてくると、沈黙は破られ、人々はエイズを語りはじめた。

しかし、今回の会議では『アクセス・フォア・オール（エイズ対策に必要な資源をすべての人に）』という標語がかかげられたが、さらなる前進は見られなかった。九・一一事件以降、日本を含む先進各国が自国の国益を強調し、エイズ対策など地球規模の問題にはお金を出し渋りつつあるからである。

■弾圧とモラルの押し付け

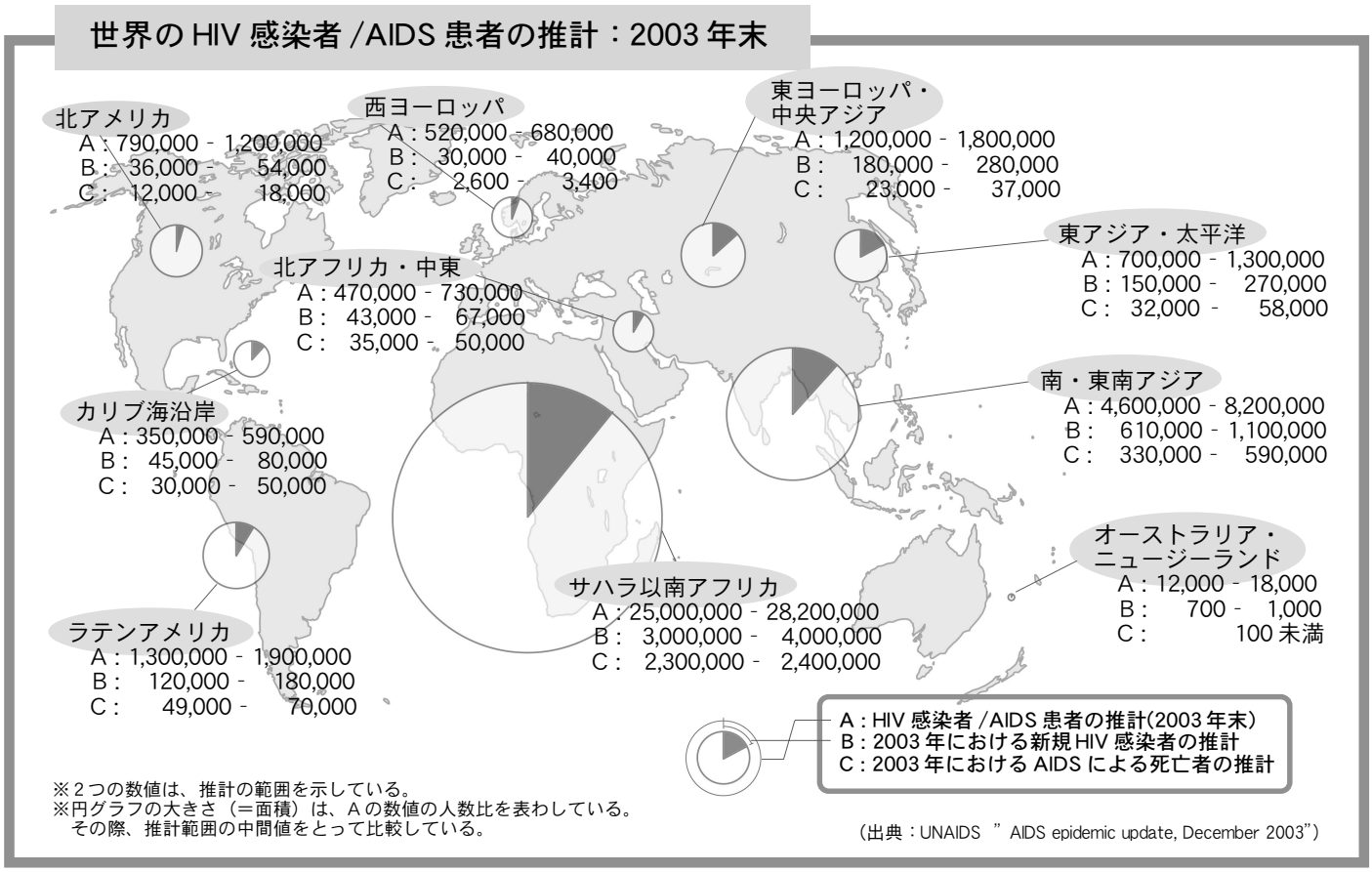
差別と人権の問題は、今回のトピックとなった。特にタイのタクシン首相と米国のブッシュ大統領に対しては抗議の声があがった。開会式のタクシン首相の演説の際、ノー・モア・ライ（これ以上嘘をつくな）と書かれたプラカードを持った一群が立ち上がった。タクシン首相が過去二年間に二千五百人以上の麻薬関係者を逮捕の途上で射殺させたことに対する抗議である。ハーム・リダクション（麻薬の害悪軽減）運動の代表者は、「弾圧を強めれば、彼らは皆、地下に潜り、対策の取りようがなくなってしまう」と涙を流しつつ訴えた。射殺された人間の中には、麻薬中毒から抜け出しつつあった彼の友人が何人もいたそうである。一方、ブッシュの写真にはコンドームが投げられた。これは、ブッシュ大統領が『純潔と貞操』を強調したエイズ対策を打ち出したことに対する抗議である。現実にそぐわないモラルの押しつけは、感染者に対する差別を強めやすいからである。差別と人権の問題は政治的リーダーの姿勢によって煽（あおら）られやすい。バンコクエイズ会議は、南アフリカのネルソン・マンデラ元大統領のスピーチとともに幕を閉じた。エイズ対策をしっかりやるよう世界の指導者たちに呼びかけ、「明日は私の八六歳の誕生日、そろそろ引退させてくれよ」と結び、満場の喝采（かっさい）を浴びた。

※注① 抗HIV薬が開発され、発病を抑えることが可能になった。

※本特集では、「HIV、AIDS、HIV／AIDS」と「エイズ」という表記が混在しています。基本的には寄稿者の記述通りに表記しています が、主には、前者はHIVとAIDSの違いを明確にする場合に、後者はHIVとAIDSの両方を含めた包括的な意味で使用されています。

～　グラフとＱ＆Ａで見る　～

知ることから始まる：ＨＩＶ／ＡＩＤＳ の現状



HIV 感染者 /AIDS 患者数	合計	4,000 万人
2003 年の新規 HIV 感染者数	合計	500 万人
2003 年の AIDS による死亡者数	合計	300 万人

■ＨＩＶとはなにか？

ＨＩＶ（ヒト免疫不全ウィルス／Human Immunodeficiency Virus）は、人間の免疫機構の細胞に感染するウィルス。これに感染すると、本来人間の身体が持っている免疫力が低下し、さまざまな病気にかかりやすくなる。

■ＡＩＤＳとはなにか？

ＨＩＶに感染すると、普段では発病しないようなさまざまな病気にかかりやすい状態になる。ＡＩＤＳ（後天性免疫不全症候群／Acquired Immune Deficiency Syndrome）とは、ＨＩＶ感染が原因でさまざまな病気を発病した状態のことをいう。

■ＨＩＶはどのように感染するのか？

他人に感染するだけの量のＨＩＶは、主に血液、精液、膣分泌液に含まれている。主な感染経路としては、次の三つがあげられる。

①感染者との（コンドームを正しく使用しない）性交渉
②感染者との注射針・注射器の共用
③感染している母親からの母子感染

■ＨＩＶに感染したら、かならずＡＩＤＳを発病するのか？

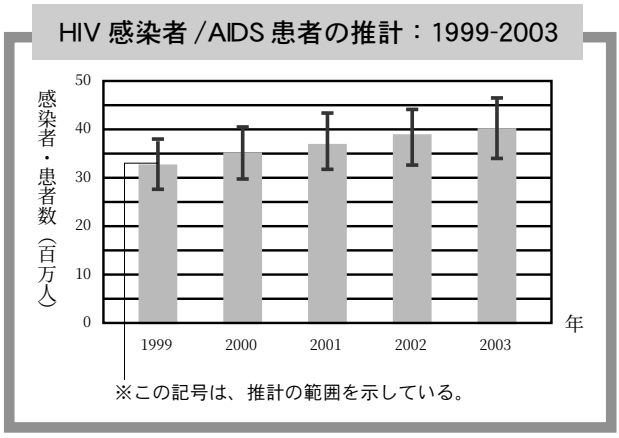
抗ＨＩＶ療法（後述）を施（ほどこ）さない場合は、感染から通常五～十年ほどでほぼかならず発病する。なお、Ｈ

参考文献：
・UNAIDS/WHO(2003) “AIDS epidemic update, December 2003” UNAIDS/WHO
・UNAIDS(2004) “UNAIDS Questions & Answers” UNAIDS
・エイズ＆ソサエティ研究会議(2001)『エイズを知る』 角川 one テーマ 21、角川書店
・2003 年度保健分野 NGO 研究会(2003)『どうする!? NGO の HIV/AIDS プロジェクト』 外務省経済協力局民間援助支援室

ＩＶ感染が確認された後、ＡＩＤＳ発病以前だとＨＩＶ感染者、ＡＩＤＳ発病と診断されるとＡＩＤＳ患者と呼ばれる。

九〇年代半ばには、ＨＩＶの増殖を抑える薬（抗ＨＩＶ薬）が開発され、ＡＩＤＳの発病を抑え、遅らせることが可能となった。これにより、高血圧や糖尿病と同じく「慢性病」として扱えるようになった側面もある。免疫力がある程度以下になると、この療法が適用される。これを抗ＨＩＶ療法と呼ぶ。

ただ、あくまでＨＩＶの増殖を抑えるだけであり、体内からＨＩＶを完全に排除することはまだできない。また、発病前の期間でも体内にはＨＩＶがあるため、他人に感染させる可能性はある。



■ワクチンはあるのか？

ＨＩＶ感染の予防のためのワクチンは、開発中ではあるが、まだ実用化されていない。

■ＡＩＤＳは治療できるのか？

基本は抗ＨＩＶ療法が主な治療となる。免疫力がすでに低下しているために、発病した個々の病気に対する治療も困難。また、感染したＨＩＶを体内から排除することはできないので、現時点では完治は不可能。

■ＨＩＶ／ＡＩＤＳに対する対策は？

いくつかの側面における主要な点を次にあげる。

①予防・啓発…予防にはコンドームの正しい利用が非常に有効だが、知識を普及させるだけでは人々の行動は変わらない。そのため、文化的背景も含めての啓発が必要。

②母子感染予防…妊婦が抗ＨＩＶ療法を受けること、母乳を与えないことなどで、感染を防ぐ。

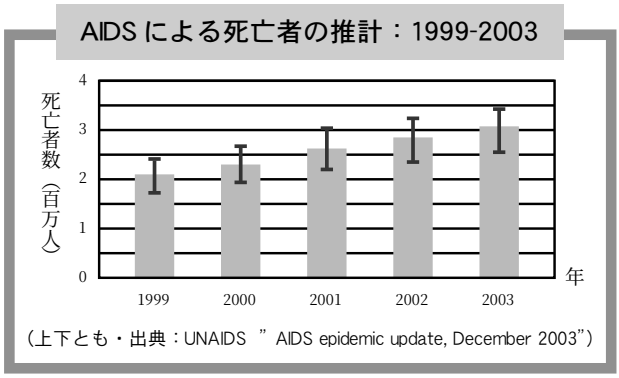
③ＨＩＶ検査…ＨＩＶに感染しているかどうかの検査が自発的にできて、同時に検査の意味や予防、治療についてのカウンセリングが行なわれる環境を整えることが重要。

④ケア・サポート…感染が判明したりＡＩＤＳが発病した人に対する生活面＆精神面のサポートが必要。

⑤治療…抗ＨＩＶ薬を用いた治療。

⑥ＡＩＤＳが原因の死亡による社会的インパクトの軽減…ＡＩＤＳ遺児（ＡＩＤＳにより片親もしくは両親を亡くした児童）への支援など。

⑦差別・偏見の解消…これがなされないと、前述①～⑥がうまく進められない。総合的な対策が必要。



■なぜ途上国にＨＩＶ感染者／ＡＩＤＳ患者が多いのか？

社会基盤整備の状況も含めて、さまざまな要因が考えられる。

予防面では、啓発能力のある人材の不足などがあげられる。また、コンドームの普及も、経済的・文化的に困難な場合がある。

抗ＨＩＶ薬の多くは先進国で開発されている。その場合、特許料が価格に反映されるために、途上国で薬を購入する際に非常に高価になる。これが、医療面での負担となっている。ただ、途上国内で同じ効果を持つ薬（ジェネリック薬、コピー薬などと呼ばれる）の開発・提供が行なわれた例もある。

■他の病気との大きな違いは？

経済的側面から見ると、ＨＩＶ／ＡＩＤＳは主要な働き手の世代・子育て世代を直撃するために、社会全体の経済生産性が低くなる。

社会的側面では、ＨＩＶ感染者／ＡＩＤＳ患者に対する差別や偏見が根強い。これは、最初の症例がゲイのグループだったことや、性交渉で感染すること、文化的・宗教的な背景などから生み出されてきたと考えられる。教育面を考えても、教師・生徒双方の減少によって、次世代を担う子どもたちのための教育システム自体の質と効果が失われてしまう。

医療的側面から言えば、抗ＨＩＶ薬に副作用があることや、複数の薬を同時に服用しなければならない場合がある点があげられる。他にも、治療を始めたら薬を飲み続けなければならない（途中で止めると、身体に耐性ができて同じ薬が効かなくなる）など、治療には適切な医療的指導が欠かせない。

南アフリカでの調査と背景

ＪＶＣ南アフリカ現地調査員　蜂須賀 真由実

九四年にアパルトヘイト体制から民主化への移行が実現し、今年民主化十周年を迎えた南アフリカ（以下南ア）ではＨＩＶ／ＡＩＤＳが十年前の予測よりもはるかに深刻な問題となっている。ＪＶＣ南アは、その大きな課題に取り組む可能性を探るため、今年五月から九月にかけて南ア・リンポポ州でＨＩＶ／ＡＩＤＳに関する調査を行なった。

◆◆◆

南アに住んでいると、「ＨＩＶ／ＡＩＤＳ」という言葉を見聞きしない日はないと言っていい。南アは、人口四千四百万人のうち約五百万人がＨＩＶに感染していると言われており、一国の感染者数としては世界最大である。なぜ南アでこれほどＨＩＶの感染が拡がったのだろうか。

私たちは、今回の調査中、いろいろな人にこの質問をしてみた。そして、いつも真っ先に返ってくる答えが「貧困」であった。アパルトヘイト政策により土地を収奪されたために今でも農村では自給できず、かといって農村に職があるわけでもなく、多くの男性は鉱山や白人農場へ出稼ぎに行く。長期間にわたり家族から遠く離れた生活の中で、売買春や新たなパートナーを通してＨＩＶ感染が拡大する。そして、いったんＨＩＶに感染しＡＩＤＳを発症すると、一家の働き手が病気になることで収入がなくなり、残された家族は生活の負担と看護の負担を背負うことになる。親がＡＩＤＳで亡くなり孤児になる子どもも年々増えている。

さらに、患者本人とその家族には、ＨＩＶ／ＡＩＤＳに関する差別や偏見も待ち受けている。農村部では都市部以上に情報や支援が少なく、ＨＩＶ感染者は感染の事実を家族にさえ言えず孤立しがちである。ＨＩＶ感染がわかった女性が夫にその事実を告げたため、暴力を振るわれたり離婚されたりすることも多いという。たとえ女性の感染が夫からもたらされたものである疑いが強い場合でも、である。

このように社会に大きな影響を与えているＨＩＶ／ＡＩＤＳに取り組むため、南アでは多くのＮＧＯやＣＢＯ（コミュニティを基盤とする団体）が活動している。今回の調査で私たちは多くの団体を訪問させてもらった。それらの団体は、新たな感染を防ぐための予防・啓発活動や、看護が必要な人への訪問看護、ＨＩＶ感染者が経験や悩みを共有しあうための場の提供、ＨＩＶ感染者の栄養改善のための家庭菜園、孤児への支援など、さまざまな活動を行なっていた。

人々が言うようにＨＩＶ／ＡＩＤＳ拡大の原因が「貧困」であるなら、取り組むべき課題はとてつもなく大きく、何から取り組めばいいのか途方に暮れる。しかし、ＨＩＶ／ＡＩＤＳが貧困家庭を直撃し、女性や子どもなど社会のなかでもっとも影響を受けやすい人々をさらに困難な状況に追い込んでいるのも事実だ。その悪循環を断ち切り、人々が希望を持って生きられる社会が実現されるためには、新たな感染の予防やＨＩＶ感染者が社会に受け入れられるための環境づくりなど、様々な支援が必要とされている。ＪＶＣは今後、現地ＮＧＯと一緒にそれらの活動に取り組んでいこうと思っている。

南アフリカにおける HIV/AIDS の状況：2003 年末

・感染者 / 患者数 … 約 530 万人
→ 1 ヵ国の感染者 / 患者数としては世界最大。国民の約 1/8。

・死亡者数(2003 年) … 約 37 万人
→ 1 日約 1000 人が死んでいる。

（出典：UNAIDS/WHO "Epidemiological Fact Sheet - 2004 Update : South Africa"）

コンドームを使おう！

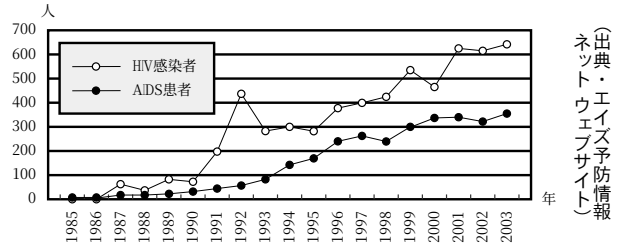
乗り合いタクシー乗り場で女性たちが手拍子をとりながら歌い始めた。彼女たちはＴＶＡＡＰというＮＧＯが行なう予防・啓発活動に参加しているボランティアだ。コンドームは政府が無料で配布している。

彼女たちは歌や劇を通して「ＨＩＶ／ＡＩＤＳとはどのような病気か」「どうすれば予防できるか」ということを伝えていく。今日の予防活動の対象者はタクシー乗り場に集まる人々。大きな声で歌を歌いＨＩＶ／ＡＩＤＳのことを伝えていく。ボランティアたちはこのような活動を村の学校やクリニック、酒場でも行なっている。

■劇を通して HIV/AIDS のことを伝えていく。

すべてが順調というわけでもない。あるボランティアは、「コンドームを使うことが大事という知識を得ても、それを使うように態度を改めてくれない男性

日本国内のHIV感染者/AIDS患者の推計：1985-2003



（出典・エイズ予防情報ネットウェブサイト）

— リボンバッジ —

南アフリカのジョハネスバーグ市にあるHIV感染者の女性グループでは、伝統工芸であるビーズ工芸で、レッドリボンをあしらったバッジなどをつくっています。これは、定職に就けない彼女たちの貴重な収入源となっています。JVCではこのリボンバッジを販売しています（1個400円）。申し込みは、JVC原田まで。TEL：03-3834-2388

日本はエイズ対策「後進国」か

シェア＝国際保健協力市民の会副代表／医師　沢田 貴志

■責任転嫁の構造

九六年に開発されたHAARTと呼ばれるエイズ治療薬は、エイズ患者の健康状態を著しく改善させた。この結果、エイズは「必ず死に至る病」から「糖尿病や高血圧のような慢性病の一つ」に変化しつつあるとすらいわれた。多くの先進国では、エイズを発病する人の数は減少をし始め、エイズ対策は一つの峠を越えたといわれている。しかし、日本ではいまだにエイズを発病する人の数はほぼ直線的に増加を続けている。

エイズは都市から農村へ、富裕層から貧困層へ流行が移動していく。このことから、エイズが個人のモラルの問題ではなく、社会資源にアクセスできないことがリスクを高める「社会的な病気である」ことがわかる。では医療へのアクセスが整っているはずの日本でなぜエイズ発病者が増加を続けているのだろうか。

これは、過去二十年間に日本でエイズがどのように報道されてきたかという問題と無縁ではない。八〇年代から外国人・同性愛者・性産業従事者・女性・若者とターゲットを変えながら、社会の多数者が少数者に責任を押し付けて非難を集中するという構造が現在まで続いている。

この結果、感染のリスクにさらされやすい人々が必要なエンパワーメントを受けることができず、有効な予防対策が進んでいない。また、こうした責任転嫁の結果として、社会の大多数が自分たちがリスクを持っていることを否認してしまっている。

ヨーロッパ、オーストラリアそしてタイやブラジルでも、男性同性愛者や性産業で働く労働者、HIV感染者自身が健康を追求する権利を主張し、市民社会がこれに連帯することで感染率を下げることに成功している。しかし日本では、こうした少数者に対する支持的な環境が乏しく、多くの当事者が声をあげられずにいる。エイズ患者の四分の一を占める在日外国人感染者に至っては、過半数が滞在資格を持たないがゆえに初期医療を受ける権利すら保障されず、重症化して死に直面する状態になるまで検査も治療も受けられていない。

■人権から出発

HIVは、流行が始まってから一定の時期を過ぎると多様な人口集団の中での感染が広がり始め、社会の多数派の中での流行の時期に入る。日本ではここ数年間に日本人男性の男女間での性感染による発病者が増加してきており、献血での陽性率はヨーロッパの主要国を追い越すようになってきた。このことは、日本でもエイズが全ての人々にとって他人事ではなくなってきていることを示している。今後、本格的な感染の拡大が確実となっている日本でこそ、若者を始めとする全ての生殖年齢にある人々に、感染の危険性と予防の具体的な方法が伝えられなければならない。しかし現実には、性教育に対する批判が強く、コンドームを提示した具体的な性感染症予防のための教育が中止を余儀なくされている。

エイズ対策では、社会の中で差別されがちな少数者を支援し、対等なパートナーとして運動を進めることが成功の鍵である。また当事者の参加により、現実に即した対策を立案していくことも重要である。こうした手法は開発途上国で私たちが関わってきた開発の手法と基本的には同じである。対等な権利を保障する人権を尊重した姿勢と現場の実情にあった草の根の手法の重視こそが、日本のエイズ対策に求められている。国内での取り組みの前進なくして、有効な国際社会への支援はできないだろう。

ボランティアの苦悩

NGOが行なう予防・啓発活動や訪問看護は数多くのボランティアの協力で成り立っている。その多くが女性である。ある訪問看護ボランティアの女性が自分の担当している孤児について話してくれた。

「その孤児たちは食べ物を買うお金がなくて、パパイアだけを食べていたの。だから私は自分の家からパップ（とうもろこしの粉を練ったもの）を持っていってあげたんだけど、私ができることにも限界があるし…」

支援を必要とする人々が抱える課題と、本人自身も決して裕福とはいえない彼女ができることとの狭間で日々悩み、とてもストレスがたまるのだという。それでも、週一回のミーティングで他のボランティアの人々と悩みを共有することでストレスを発散し、活動を続けている。南アには彼女のような女性が無数にいる。（蜂須賀）

も多い。それでも自分たちにできることを続けているの」と悩みを打ち明けてくれた。彼女たちの試行錯誤は続く。（蜂須賀）

ラオス

ビエンチャンプロジェクト終了報告

ラオス事業担当　川合 千穂

■牛の糞を投入し、田の土壌改良を行なう。

97年、タイの通貨バーツの下落をきっかけに、それまで上昇の一途を辿っていたアジア経済は大きな打撃を受けた。同じ年、JVCラオスではそれまでの村の開発ボランティアを通した幅広い農村開発から、より農業に焦点を絞った活動へとプロジェクトを転換させた。今年6月をもって終了したこのプロジェクトについて報告する。

■当時の背景

ラオスではまだ比較的豊かな森が残され、人々は森を中心とした生活を営んでいるが、その暮らしにも徐々に変化は起きていた。農業では化学肥料や農薬が入り始め、その害をよく認識せずに使用していたり、村人の生活を支える森が伐採され、代わりにユーカリなどの商業用木材が植林されたりしていた。

村人の主な生計の手段である農業に活動の焦点を当て、農業を基盤とした豊かで安定した生活を実現したいという切実な村人のニーズに応えるべく活動が始まった。

■自然農業の普及

自然農業（ここでは、「森の中に見られる自然のサイクルをいかす農業」のことをさす）の大切さを伝えることから活動は始まった。実際に村人とともに森に入り、土、木、葉、太陽、雨、虫や鳥などを通して見える自然の中の循環。これを田や畑で再現する農業をつくりあげていく。身のまわりにある資源を利用した肥料など土壌の改善を行なう技術を伝えた。また、現金収入につながる果樹栽培にも関心があり、良い品種を普及するための果樹苗配布や雨季における野菜栽培のトレーニング、農薬や化学肥料について影響を考えるためのワークショップも実施した。

■生活改善

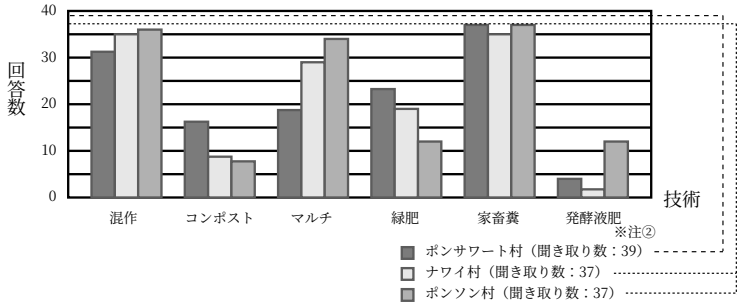
村人から根強い水への要望があった。〇一年から、その土地に適した、村人も参加しながら行なう給水支援を実施した。浅井戸、手押しポンプ式深井戸、川の水を利用した導水施設などを村人たちと話し合いながら建設した。特に全村人が参加して行なう導水施設では、何日もかけて村に入り建設を一緒に行なうため、これまで知らなかった村の状況が把握できたり、その後村人からの意欲的な参加を引き出したり、地道な農業の活動を支える結果になった。

■七年の成果とは？

対象村の村人の多くは七〇年代に内戦の戦火から逃れ、北部山岳地帯から移住した人々で、これまでは移動式焼畑農業を行なって暮らしていたが、政府の政策で焼畑は禁止され、定住化農業を行なわなくてはならなった。また、野草や果物などを森から取得していたが、伐採により森林が減少したことで、これら林産物も減り、野菜や果樹を自分たちで植えるようになった。

農業プロジェクトとして七年間、当初三村にて、途中から三村増えて計六村で実施された。この間に、村を取り巻く状況は色々と変わったが、特に大きい変化は、道路が改修されたことである。首都ビエンチャン市近郊であるため、首都の市場の拡大と共に改修された道路を通って多くの仲買人が農作物を購入するために村に来るようになった。

■自然農業技術の実践に関する聞き取り結果



これまでの成果を把握するため、三村で詳細な聞き取り調査を行ない最終評価を実施した（グラフ参照）。多くの人が混作※注①、家畜糞を使用した肥料を利用している。これら二つの技術は伝統的に村人が実施してきたものだが、伝統の再評価にもつながった。また、土の保湿のために敷き藁（わら）などを作物の周囲に敷くマルチも多くの人が実践している。刈った草を土の表面にそのまま置くなど手軽なやり方が実践の鍵になっている。

◎

これまでいろいろな方々に支えられてきたビエンチャンプロジェクトだが、七年の活動を通して、ある程度の成果を上げることができていることから、今年六月末に、予定通り終了となった。最後の村訪問はどこでもバーシー（儀式）が開かれ、多くの村から、これまでの感謝と今後とも交流を続けて欲しいという声が寄せられた。

※注①　ひとつの畑にさまざまな種類の作物を一緒に栽培すること。病虫害を抑え、土地や雨水を有効利用できる。

※注②　細かく刻んだ植物や果物、貝などを砂糖に混ぜて一週間以上発酵させることでできる液状の肥料。

イラク

日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）設立に関して

イラク事業担当　佐藤 真紀

9月、JVCは他5団体と合同で『日本イラク医療支援ネットワーク（以下JIM-NET）』を設立した。薬や医療機材が慢性的に不足しているイラクに対して、現地のイラク人医師と連携しつつ、本当に必要とされている医療支援を実現するためのものだ。

■支援に欠かせない専門性

きっかけは、昨年、製薬会社から白血球を増やす薬の寄付の申し出があったときのことだ。白血病の治療では、抗ガン剤でガン化した白血球の活動を抑えながらも、正常な白血球を増やさなければならない。このことから、日本での治療には欠かせない薬である。しかし、「イラク人が使ったことのない薬を日本から持ち込んでいいのか」「もしものことがあったら誰が責任を取るのか」など、何人かの医師に相談してみたが、意見が分かれた。結局、JVCは、この薬を送るのをあきらめた。専門知識もないJVCでは判断できなかったからだ。ただ、この薬があれば助かる子どもがいる。

このときの悔しい思いを、私は医師でもある林達雄理事にぶつけた。チェルノブイリ連帯基金（以下JCF）は、同じ薬をチェルノブイリに持ち込んで成果をあげていた。林理事と旧知の間柄である鎌田實（みのる）医師を紹介してもらうことになり、二人でJCFの理事会まで押しかけ、「せめて、医学的なアドバイスをいただければ」と懇願（こんがん）した。

これで、鎌田医師の意思は固まった。「一緒にやりましょう」それでできたのが、JIM-NETである。

JIM-NETの目的は三つある。

①専門性→医学的に正しい援助であること。

②効率性→過不足のない支援ができるように内外のNGOが調整しあう。

③継続性→イラク政府が自立して安定するまで、支援を継続するために協力すること。

バスラのイブンガスワン病院からジャナーン医師が来日したときには、長崎のアジアと結ぶ市民の会・長崎の川端強氏と映画監督の鎌仲ひとみ氏も合流して、どのような支援が必要か話し合った。

■アンマンで第一回会議を開催

八月十一、十二日には、イラクから医師を呼んでアンマンで会合を持つことができた。バグダッドを中心にバスラからも一名の医師が加わり、六名の医師と、日本からも二名の医師と医療機器の技師が一名参加して専門的なやり取りをすることができた。

イラクの治安は非常に悪化しており、医師たちが無事にアンマンまで来られるかどうか心配されたが、彼らは、事前にリクエストした資料依頼に対して詳しいデータを準備し、それぞれが丁寧にプレゼンテーションをしてくれた。全員がパワーポイント※注①を器用に使いこなすのも少し驚いた。ついこの間までは経済制裁でパソコンもほとんどない状況だったからだ。

■会議の様子。イラクと日本の医師が会合した。

バグダッドのセントラル小児教育病院のイブラヒム医師は、「料理と同じ。はじめからステーキはいらない。塩とパンがまず必要だ」と、イラクのニーズを説明する。なんでも欲しがる姿勢は見られなかった。「自分たちの力で、自分たちの国の子どもの命を守りたい。薬も、できるだけキマディア（国営の薬配給会社）を通して調達する。足りない薬を連絡するので、すぐに送ってほしい」「中古の医療機器でも、定期的に整備して使えるようにサポートしてくれるなら、日本から送ってほしい」と謙虚である。

帰りがけに、バクダッド内での交通費をわずかながら払おうとしたが、イブラヒム医師は「イラクの子どもたちのために薬代として使ってください」と受け取ろうとしなかった。

■今後の予定

JIM-NETに現在参加しているのは、JVC、JCF、アジアと結ぶ市民の会・長崎、劣化ウラン廃絶キャンペーン、童話館、イラク医療支援・通販生活の六団体である。JIM-NETは、これからもお互いの活動を尊重し、緩やかなネットワークを拡大していく予定だ。

※注①　パソコン上でプレゼンテーションを行なうためのソフトウェア。

■ザイナブちゃん、5歳。CD『イラクの子どもたち』で、ママの歌を歌ってくれている。残念なことに、出血がひどく3ヵ月前に死亡した。

カンボジア

漁業共同体広報キャンペーン

アクションリサーチ・
漁業共同体調査担当
後川 泰章

二〇〇〇年末フンセン首相直々の政令により、トンレサップ湖の商業漁業権区域の約半分が無効とされ、漁業共同体を通じて地元の零細漁民に開放されました。コンポンチュナン県ではすぐに四十四ヵ所の漁業共同体が設立されましたが、メンバーである住民が主体となった活動はあまり活発ではないようです。

その理由は、漁業共同体に法的な効力を持たせる新漁業法及び政令が発効されず、いまだに漁業共同体に法的な裏付けがないこと、地域住民の意思とは別に行政主導で拙速気味に漁業共同体の設立が進められたことがあげられます。さらには、地域住民は、トンレサップ湖の水位が上昇する雨季には高床式住居の床下まで浸水するために漁をするものの、水が引いている季節は畑で唐辛子やとうもろこしを育て、田で稲を育てています。漁業が主体だった時代もかつてあったようですが、近年の漁獲高の減少から、すでに漁業から農業へと比重を移してきているようなのです。魚が減った原因は、大型漁業が増え、また商業漁業区内の浸水林の伐採で魚の繁殖場所が減少しているため。このことを痛感している住民がいる一方で、生態系を損ねるような違法の漁法を行なう者も後を絶ちません。

住民が地域の漁業資源を保全し利用することを目的とした漁業共同体ですが、行政主導で設立され、法的裏付けもないなか、いまだに十分に住民に情報が提供されていない状況が明らかになりました。ＪＶＣは、トンレサップ湖の水位が最高位になりコンポンチュナン県の漁業地域が漁期に入るこの季節に各村々を訪れて、住民が自分たちの権利を守れるように、漁業共同体に関する情報提供キャンペーンを行なうことを考えています。今年六月に編集・出版した『漁業共同体運営の経験から』という冊子を活用する予定です。

message from the field

プロジェクトの現場から

写真：和気あいあいと作業するカレンダーボランティア隊。

カレンダー

お届けします！カレンダーボランティア隊

カレンダー事務局
荻野 洋子

十月に入り、カレンダーの販売も本格的に始まりました。皆さまに郵便でカレンダーのお知らせをした後は、毎日事務所に百通、二百通のお申し込みが届きます。うれしい悲鳴！

そのうれしい悲鳴をしっかりフォローしてくれているのが、ボランティアのみなさんです。カレンダーボランティア隊は、現在約二十名。仕事や学業の合間に週に一回手伝いに来てくださる方もいれば、ほとんど毎日、スタッフ以上に事務所につめて動いてくださる方もいます。学生さん、お勤めの方、退職された方、主婦の方、この秋から来てくださった方もいれば、もう何年もカレンダーに関わってくださっている方も。

その一人、小杉さん。「私は国際協力ボランティアに興味を抱いていましたが、何から始めればいいのかわからず、もやもやとした日々を過ごしていました。将来に向けてのステップを探していたときに、講演会で事務局長の清水さんから『とりあえず、どんどん動くしかないよ。ＪＶＣに一度見学に来てみれば』と言われ、ＪＶＣでボランティアするようになりました。今は自分のテーマを模索しているところです」

週二回発送事務を担当している豊田さんは「カレンダーに写っている人々の真剣に祈る姿に感動し、皆さんにもお届けしたいと思っています。平和な世界のためには、ひとりひとりの協力と理解が不可欠だと思うので…」と。お知りあいにもカレンダーをどんどん勧めてくれています。

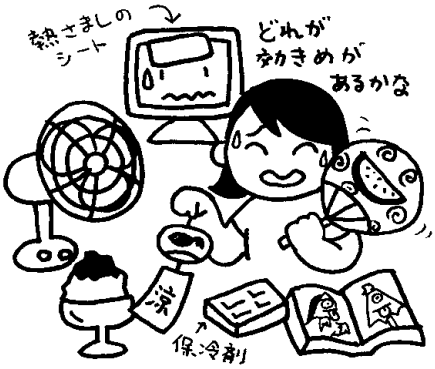
長くカレンダーの発送を担当している中井さんは、カメラマン。「来られる範囲で来ているだけ」と本人は言われますが、カレンダーが傷なくきちんと届いたか、誰より心配してくれているようです。

一同の願いは、「皆さまのご注文をお待ちしております！」

スタッフのひとりごと

パソコンと私の微妙な関係

広報／JVCコンサート事務局　石川朋子



イラスト／かじの 倫子

「クーラーつけていいですか？」

おずおずとみんなに声をかける。夏の盛りならまだしも、秋への季節の変り目、たとえ室内が蒸していても、外が涼しい日は言い出しづらい。が、遠慮している場合ではない。ひとえに、私のパソコンのためである。

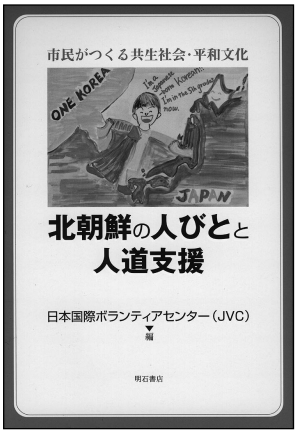
夏のある日、私のパソコンの画面が突然消えた。しばらくデータのバックアップをとっていなかった私は、真っ青になった。どうやったら復活するのか思案しているとき、ホームページインターンの鳥山氏が「暑すぎるんじゃないですか、ここ。クーラーつけたらどうでしょう？」と一言。クーラーをつけて涼しくし、半日ほど放置した後、祈るようにスイッチオン！　あっさり復活。彼曰く、「中の空冷ファンが機能せず、排熱がうまくいってないのかも」。

その後、「クーラーつけて」と言い出せず、真っ青になること約6回。毎回、クーラーをつけると復活した。以来、私は鳥山氏の「パソコンは涼しい快適空間で」説を信じている。経験から、顔や首すじがややべたつく暑さは危険である。実際、この原稿を書いている途中も、後ろの人に「ねぇ、暑くない？」と、話しかけたときに画面が真っ暗に…。

パソコンを変えるか、修理に出すか、真剣に考える今日この頃。私の担当は、「JVC国際協力コンサート」の事務局。12月の公演にむけて協賛企業への書類作成、チケット販売の記録、合唱団とのやりとり、プログラム原稿作成…、パソコン無しでは成り立たない日々に突入している。経費云々と言っていられるのは今のうちかもしれない。「どうするかなぁ、このパソコン…」こんな愚痴さえ聞かれていそうで、どきどきする。パソコンのご機嫌取りは本当に難しい。

みるよむきく

『北朝鮮の人びとと人道支援』



日本国際ボランティアセンター（JVC）編　明石書店　1500円＋税

十年ほど前、JVCが北朝鮮支援のプロジェクトを開始したと聞いて、JVC発足の当初から関わりを持ってきた私は、ある感慨と同時に危惧の念も抱いた。七〇年代の学生時代に韓国民主化連帯運動に関わって以来、私は朝鮮半島に関心を持ってきた。朝鮮半島は、日本に最も近く、それだけ複雑な歴史と葛藤を持つ地域である。近いからこそ、対立と不信と偏見が、相互に根強く存在する。同書で筒井由紀子のいう「難しさ」が予見できたからこそ、私は危惧を抱いたのである。

しかし、それは杞憂だった。JVCは人道援助を掲げ、他のNGOとともに、現地に飛び込んでいった。飢え、苦しむ人々がいれば、どこであれ救援に赴くというその精神が、両国の「難しさ」に道を開いたのだろう。試行錯誤の中で、韓国のNGOや在日の朝鮮学校との関わりが生まれ、歴史に触れ、日朝関係や南北関係にも認識が広がっていく。そのプロセスが、本書を読むとよくわかる。

歴史は、いくら反省してもやり直すことはできない。だから、いま、ここの出会いから、信頼関係をつくっていく以外にない。南北関係の好転によって、韓国の小学校の先生が、日本で朝鮮学校の子どもたちと対話するという、少し前であれば想像すらできなかった事態が生まれた。本書にも紹介された〇三年のワークショップに私も参加して、朝鮮学校の女生徒が受けた日本人の嫌がらせや暴行の話を、ポロポロと涙を流して聞いていた韓国の女の先生を見た。その涙は、どれほどその少女の心を癒しただろう。こういう小さな出会いが、やがて全体の関係を変えていくに違いない。

本書は小著ながら、朝鮮半島と日本の未来に向けた希望と可能性、具体的行動のためのヒントを随所に散りばめている。

（岩波書店『世界』編集長　岡本 厚）

《開発協力》

タイ THAILAND

地場の市場づくり

タイ東北部コンケンでは、地域循環の流通システムをつくり出すために、地場の市場づくりを進めている。七月から八月にかけて、JVCベトナムのスタッフとカウンターパートの行政官、フィリピン・ネグロス島NGOのスタッフが現場を訪れ、農民やNGOの人々と交流した。東南アジアで持続的な農業を進めていく上での課題、地域循環の流通システムをどうつくるかなど、互いに真剣に経験を交換し合えて、いい交流となった。（倉川）

農村で学ぶインターンシップ

NGO活動や開発に興味がある人を対象に、タイの農村で学ぶ機会を提供する本プログラムでは、現在四名が九期生としてタイに滞在している。帰国を二ヵ月後に控えた時点（九月）でチェンマイへのスタディツアーを行ない、九期生は持続可能な農業を普及するNGOや有機農産物生産者を訪問した。生産者が直接農産物を売るチェンマイ市内の有機市場では、そこに買い物に来る消費者にインタビューを行なった。実際に消費者と話すことにより、チェンマイの消費者の有機農産物に対する意識の高さを知ることができた。（森本）

カンボジア CAMBODIA

持続的農業と農村開発（SARD）

安全な水や食糧の確保を目指して、九四年から活動中。活動地では記録的な少雨のため稲の苗床が干上がり、乾いた田に穴を掘って枯れかけた苗を植える農民も見られた。九月後半に入りようやくまとまった雨が降るようになったが、例年通りの米の収穫は期待できない。コメ銀行を活用する他、米の代わりとなるイモ類の栽培などを検討する必要もある。（山﨑）

資料・情報センター（TRC）

持続的農業や農村開発に従事する人々に資料や情報を提供するために九五年から運営。蔵書数や資料の数が増えているため、有用な資料や情報などが利用者に十分に活用されるよう、利用者の関心の高い分野の本や雑誌の記事などについて電子メールなどを利用して紹介することを検討している。（山﨑）

技術学校

自動車修理と溶接を学ぶ職業訓練校・整備工場。新学年度が始まる十月初旬の入学試験の申し込みをプノンペン校は受付け中。カンボジア政府からの移転案についてできれば移転したくない、と文書で回答。

シアヌークビル校は経営改善努力を続け、八月は月間修理台数が六十一台と創立以来、最高の記録だったが、売り上げ増にはあまりつながらなかった。全職業訓練校を新労働職業訓練省に移管するという準政令が出たが、シアヌークビル工場はJVCが関わり始める前から運輸局が運営していたので、学校のみの移管は同校の運営費も職員も不足するので、運輸局長は工場と学校の両方を移管しないよう運輸大臣に陳情した。（米倉）

調査研究・政策提言

地元の住民による漁業共同体（漁業組合）がトンレサップ湖の自然資源管理を行なうよう支援。コンポンチュナン県にて漁業共同体運営に関する教本を用いて啓発キャンペーンを計画・準備。

土地調査は、「体系的土地登録」及び土地無しの人々に土地を分配する「体系的土地権利譲与」の事例調査、バンテアイメンチャイ県などへ再定住行動ネットワークに同行し、情報収集。

ラタナキリ県先住少数民族の共有林管理を支援するNGOであるNTFPの暫定理事会に参加し、運営体制改革、常務理事会創設を手伝った。（米倉）

ラオス LAOS

森林保全と自然農業（カムアン県）

八月から九月にかけての豪雨で県内の多くの地域が水没した。国道沿いでは人々が捕った多種多様な魚が売られている。カムアン県内の五郡九村で、安定した食べ物づくりと果樹栽培技術を広めるため、以前配布した果樹苗（マンゴー、グァバなど五種）のフォローアップを行なった。村人はこまめに手を入れており、生育状況は比較的良好であった。今後、壊れた浅井戸の修理や掘削、その周りでの家庭菜園づくりなどを計画している。（田坂）

ベトナム VIET NAM

農村開発（ホアビン省）

○四年度から活動を実施しているタンラック郡ナムソン村の村づくり委員メンバーと共にベトナム・中北部を訪問し、住民が主体となって生活改善に取り組んでいる例を視察した。村の人々が一番インパクトを受けたのは、そのプロジェクトの内容が充実しているかどうかという点よりも、その地域の人々が真剣に生活改善に取り組んでいる姿である。大規模な支援がなくても彼ら自身で取り組むことができる「身の丈サイズ」の生活改善方法を実践している現場を訪問できたことは、今後の村づくりに大いに役立つ経験になると思われる。（伊能）

自然資源管理（ソンラ省）

住民による自然資源管理の活動を支援しているコマ村の対象集落の一つ、フアティ集落で七月中旬、集落の自然資源、農業・畜産に関する実態調査を行なった。土地の利用状況、農業や住民の暮らしなど、現状をより詳しく理解し、今後の活動計画に反映していく。八月中旬には五つの集落で、複合農業普及の一方策として住民から希望のあった試験栽培用の果樹を配布し、あわせて植樹のための技術研修を実施した。（西）

南アフリカ SOUTH AFRICA

農村開発（東ケープ州カラ地区）

安定した食料生産と農村地域の復興を目指して、〇一年より環境保全型農業の研修と普及を行なっている。植林に適している乾季に合わせ、村の希望者へ果樹苗を提供し、植え方や育て方を伝えている。また小中学校へ苗木を寄付し、植林を通して環境教育に役立ててもらう。

活動の中間評価を実施。環境保全型農業を担う農民が、自信を持って成果を語った。

堆肥（たいひ）トイレに普及が見られ、新しく四基が建設中だ。（小林）

子どもの教育支援（ジョハネスバーグ市）

オレンジファーム地区で地域住民が運営するテボホ障害児ホームを支援。リハビリなどの充実のため、現地NGOと協力してスタッフのトレーニングを行なっている。（津山）

HIV／AIDS調査（リンポポ州）

南アで深刻な問題となっているHIV／AIDSに取り組むため、今年五月から調査を実施。都市部に比べてより情報や支援が不足している農村部で現地NGOと協力して活動することを念頭に調査中。（蜂須賀）

《緊急対応》

アフガニスタン AFGHANISTAN

東部地域医療支援

・地方クリニック支援／カスクナール郡で唯一のクリニックへ、機材・薬剤とトレーニングの機会を提供。支援を始めた今期、県から「最も優秀なクリニック」との評価を受けた。薬の使用法や患者の記録など情報管理面での改善が見られる。

・女性医療従事者養成コース／日本政府の援助で完成した研修所が有効に機能するよう、設備等の支援を計画中だが、保健局の都合で遅延。

・伝統産婆の職能向上研修／安全なお産ができるよう、村の産婆さんにトレーニングと産婆キットを提供。四村で四十九名のトレーニングを終えた。十月には別の郡でも始める。（谷山）

シギ高等女学校支援

七割の生徒が屋外で授業を受けているシギ女子学校の校舎を増設。九月で九割方完成した。JVCの提供した発電機が盗難にあったが、村から代替品を提供するという申し出が出ている。新学期が始まったが校舎建設中のため、生徒たちは村の民家で授業を受けている。（谷山）

東京事務所

日本アフガニスタンNGOネットワーク（JANN）の運営と、アフガニスタンにおける武装解除、また、軍と人道援助の関係について調査。今後、調査をもとに提言活動を行なう。（谷山）

イラク IRAQ

医療支援

隣国のヨルダンを起点にイラク国内の拠点病院の要請に応え、ガン・白血病の子どもたちの治療に欠かせない抗ガン剤や抗生物質などの薬品と、検査針や点滴用の針など、不足している機材の支援を続けている。

更に日本からの他のNGOや専門家との協力関係を強めるために、日本イラク医療支援ネットワーク（JM-NET）を設立し、八月十一、十二日にヨルダンのアンマンにイラク人医師六名を招いて専門家会議を開催した。（原）

ヨルダン・イラク国境の難民キャンプの現状視察

昨年に難民キャンプの子どもたち向けに図書館を設けるなどの支援をしたヨルダン・イラク国境の難民キャンプの現状を視察（八月十五、十六日）し、大分の団体からいただいたサッカーボールを寄贈した。（原）

パレスチナ PALESTINE

ラファ緊急支援・延長

五月のガザ地区ラファでの大規模な破壊を受けて開始した、現地NGO「人間の大地」を通しての食料支援は九月末で終了予定だったが、食料の手配が道路封鎖などのために遅れたので、若干延期する。同NGOの子どもの栄養センターに、保健・栄養指導、母親たち心理的サポートのために六月から看護師一名を配置したが、破壊が続くラファではセンターへの来所者が急増しているので、来年一月まで配置を延長する。（藤屋）

難民キャンプ子ども文化支援

新学年の開始に伴い、九月からガザ地区での幼稚園児に対する牛乳とビスケットの給食が再開された。この事業は国際NGOが共同で行ない、JVCは五つの幼稚園五百人を担当する。牛乳は引き続き西岸地区ナブルスで生産されたもので、ビスケットは西岸地区ラマッラーで生産された鉄分強化のものに変った。前年度のこの事業における栄養改善状況の結果が出て、昨年十月と今年の五月を比較すると、貧血の子どもの割合は二七・三%から一八・六%に、慢性栄養失調八・六%から六・四%に減少した。（藤屋）

信頼醸成のための活動支援

人権のための医師団-イスラエル（PHR）が、パレスチナの医療系NGOと共同で、行なっている巡回診療活動に、看護師として参加している。（藤屋）

コリア KOREA

南北コリアと日本のともだち展

平壌（ピョンヤン）市ルンラ小学校で、三回目となる『朝日こども絵画展』が開かれた。七月に東京で行なわれた絵画展の応募作品のほか、平壌の小学校三校の子どもたちの絵など約九十点が展示された。八月二十六日の開幕日には、日本から朝鮮学校に通う四名が同校を訪れ、日本から持参したメッセージなどを手渡した。

日本の朝鮮学校と平壌の小学校の子どもたちは、歌や写生などの交流を楽しんだ。（寺西）

国内ひろば

JVC network

JVC国際協力コンサート二〇〇四

『メサイア』今年も開催！

大阪・十二月十一日（土）いずみホール
三時三十分開場 四時開演
東京・十二月十八日（土）
昭和女子大学人見記念講堂
三時開場 四時開演

「ハーレルヤ、ハーレルヤ」。ヘンデル『メサイア』は、日本では『第九』と並び年末に聴かれる楽曲です。『メサイア』という題名をご存知ない方でも、前述のフレーズを聴くと「これか」と気づかれます。

このJVC国際協力コンサートは、音楽を通してJVCの活動国の人々を支援しようとの目的で開催しています。海外から招聘する指揮者、ソリスト、プロのオーケストラ、大阪・東京公演合わせて約四百三十名の合唱団でお届けします。公演会場での展示やプログラムを通してJVCを紹介する大切な機会でもあります。また、当日のロビーでは、JVC活動国の手工芸品や国際協力カレンダーなどの販売と、支援団体のバザーが行なわれます。

『メサイア』を聴かないと年を越せないという方、「年の瀬に国際協力を」という方、この『メサイア』はいかがでしょうか？　お待ちしています。

（JVCコンサート事務局　石川 朋子）

■2003年 大阪公演

■2003年 東京公演

《出演》
指揮者：ハーヴィー・フェルダー（タコマ交響楽団音楽監督）
ソリスト：
ソプラノ：J. B. オンドルプ　アルト：K. ウェルド
テノール：R. ブレイシー　バス：R. ハニサカー
管弦楽：テレマン室内管弦楽団
合唱団：JVC合唱団、横浜シティ合唱団、
東京アカデミー合唱団（東京公演）
コードリベット・コール（大阪公演）

公演当日の裏方ボランティア募集しています！

チケットのお申し込み・お問合せ：JVCコンサート事務局 石川
TEL：03-3836-4108　E-mail：tomokoi@jca.apc.org

イベント報告

NGOまつり in 上野

9/12（日）

JVC東京事務所のある丸幸ビルにて、NGOまつりが開催されました。12ものNGO団体がいっぺんに事務所を解放するという初の試みでした。

そもそもこの「まつり」が企画されたきっかけは、団体同士の横のつながりをつくるためでした。不思議なことに、同じビルに十以上もの団体が事務所を置いているにもかかわらず、他の団体の人と顔をあわせる機会がなかなかないのです。そんな状況にピリオドを打つべく、「まつり」はスタートしました。

初の試みのため、お客さんがどれくらい来るかなど、不安な面がありましたが、十時のスタートと同時に人が入り始め、すぐに丸幸ビルは人でいっぱいになりました。

「まつり」に合わせてJVCの事務所も少し模様替え。いつもの雑然とした雰囲気がうそのようで、「ここはどこ!?」と叫びたくなるようなゆったりとしたくつろぎ空間がうまれました。そこでワールドバザールやカフェをひらいて、スタッフとお客さんが楽しく会話させていただきました。

■ワールドバザール。南アフリカの人形も大人気！

普段はなかなか見ることのできないNGOの事務所を見ることができ、またそのスタッフとじっくり話せたことが、お客さんにとってなによりも大きな収穫となったようです。私たちも、さまざまな人たちの生の声を聞くことができ、とても参考になりました。

当初心配されていた来場者数も、予想を上回る約二百五十人となりました。企画の段階から準備をしてきた私たちも、おかげさまで胸をなでおろすことができました。

先日の反省会では、「他団体と知り合えることができてよかった」「参加者から良い意見が聞けたり、楽しそうな表情を見られてうれしかった」などという声が聞けました。

確かに、この「まつり」を一回だけで終わらせてしまうのはもったいない！　お客さんからも、この「まつり」を続けて欲しいという意見がいっぱいありました。ということで、「NGOまつり in 上野　第二回」が開催されるのを楽しみにしていてください。

（広報インターン　江口 由紀）

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：**00190-9-27495**
加入者名：**JVC東京事務所**

7月計　**2,023,460円**
8月計　**1,818,722円**

	7月	8月
無指定	640,605円	527,368円
タイ	3,000円	3,000円
カンボジア	214,000円	0円
ラオス	99,325円	0円
ベトナム	0円	0円
南アフリカ	0円	100,000円
パレスチナ	309,991円	304,824円
アフガニスタン	226,000円	4,000円
北朝鮮	0円	5000円
イラク	530,539円	874,530円

②犬養道子「みどり一本」募金

この募金はJVC活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：**00100-8-212497**
加入者名：**犬養道子「みどり一本」**

7月計　**335,100円 / 37件**
8月計　**257,546円 / 38件**

③ JVCマンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としやクレジットカードを利用する手軽な募金方法です。

7月計　**148,000円 / 91件**
8月計　**173,500円 / 94件**

編集後記

10月2日、「国際協力フェスティバル」でボランティアの方たちと「アフガン風ナンカレーバーガー」をつくって販売しました。インドやタイとはまた違うやわらかなスパイスの刺激や、噛めば噛むほどに味わいが出る素朴なナン。その国の食事を味わうと、その地に暮らす人たちが身近に感じられます。『Trial & Error』も、読んだ後に世界の人たちが身近に感じられるような誌面づくりをしていきたいです。（広）

新スタッフ紹介

新井 綾香（あらい あやか） ベトナム事業担当

十月より東京事務所でベトナム事業を担当することになりました。大学を卒業してすぐに国際協力NGOに就職し、そこではカンボジアとラオスの障害者支援を担当していました。

インドシナに流れるゆったりとした時間と、そこに住む人々の寛容さが大好きで、今度はベトナムという新たな国に携われることがとても楽しみです。現地事務所やベトナムの人たちと協力し、困難なことにも工夫とアイデアで挑戦したいと思っています。

趣味は、中国映画とさまざまな国の猫の写真を集めることです（ベトナムでは犬を食べると聞きますが、猫は食べないようでほっとしています）。どうぞよろしくお願いします。

2004夏募金にご協力くださり、ありがとうございました。

例年にも増して暑かったこの夏も、JVCは多くの方からご支援をいただきました。お寄せいただいた募金は、アジア・アフリカにおける開発支援や、中東での緊急支援などを通じて有益に使用させていただきます。

2004年度 夏募金金額（郵便振替）

1,021件　　***8,391,662円***

また、今回の夏募金では、『JVCマンスリー募金』をアピールさせていただきました。毎月少しずつ、ご指定の金融機関の口座から自動で募金ができる仕組みです。

『JVCマンスリー募金』新規登録件数、金額

257件　（年換算）***3,078,000円***

[募金額の20%以内は管理費とさせていただきます。 また、上記夏募金の金額は、ページ左上のJVC募金の欄には含まれておりません。]

この秋、ホームページとメールアドレスが新しくなります。

2004年11月に、JVCのホームページが新しくなります。よりいっそう見やすいようにデザインを一新するとともに、皆さまへの情報発信を充実していこうと思っています。

新しいURL … **http://www.ngo-jvc.net/**

同時にドメイン名を新しく取得したことにより、JVC各スタッフのメールアドレスも変更になります。詳しくは各スタッフにご確認ください。

Trial & Error（試行錯誤）二百四十一号
一九八二年八月十六日 第三種郵便物認可
二〇〇四年十月二十日発行（通巻二百四十一号・隔月二十日発行）
発行人＝熊岡路矢
編集人＝大野和興・清水俊弘
編集スタッフ＝広瀬哲子
レイアウト＝細野純也
発行＝日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒一一〇-八六〇五 東京都台東区東上野一-二〇-六 丸幸ビル六階
電話［〇三］三八三四-二三八八 FAX［〇三］三八三五-〇五一九
印刷＝ベスト・プリンティング
定価＝五〇〇円（税込）

暮らしを彩る道具

LIFEWORK ITEMS

70

Thailand

石臼

カノム（米粉（こめこ）でつくられるタイの伝統的なお菓子）をつくっているところ。
「昔はこうしてみんな家でつくっていたけれど、今は買う人がほとんど」とは、
村のおばあさんの弁。写真ではわからないが、バイトゥーイ（パンダンリーフ）と
いうハーブで、米粉はきれいな緑色に色づけされている。
（タイ・コンケン県シーチョンプー郡コークスン村にて撮影）

JVC Japan International Volunteer Center

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

◎一般会員　10,000円
◎学生会員　5,000円
◎団体会員　30,000円
※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当へ。
hosono@ngo-jvc.net

会員数（10月7日現在）合計1,515人
（正会員 641人　賛助会員 874人）

■オリエンテーション(説明会)へ起こしください。

JVCの活動内容をご紹介しています。お気軽にご参加ください。（無料。予約不要です）

第1月曜日　午後7：00－8：30
第2・第4土曜日　午後2：00－3：30
※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail
info@ngo-jvc.net

■ URL（ホームページ）
http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。